一般廃棄物処理施設管理道路
新設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書

―― 奥ノ谷遺跡 ――
(OKUNOTANI)

1995年3月

湖陵町教育委員会

序

本書は出雲市外６市町広域事務組合の委託を受けて、一般廃棄物処理施設の管理道路新設工事に伴い、平成６年度に実施した事前調査および発掘調査の概要をまとめたものです。当初は事前調査のみ行なう予定でしたが、遺跡として確認されたところが狭いことや時間的な面を考慮して、直ちに発掘調査へ移行し、終了させることができました。

湖陵町では様々な事業にともない幾つかの遺跡を調査してきましたが、この「奥ノ谷遺跡」の近くでも昨年度、御領田遺跡と三部竹崎遺跡という２つの遺跡が発見、調査されました。いずれの遺跡も神西湖と常楽寺川の影響を受けて立地していたと考えられます。自然と向き合って生きてきた先人達の姿を知ることは、文明化された私達に非常に有益なことを伝えてくれると思います。

その意味で、本書がその一助となるものであれば幸いに思います。

なお、発掘調査および本書の刊行にあたりましては出雲市外６市町広域事務組合、島根県教育委員会をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

湖陵町教育委員会
教育長　立　花　重　男

例　　言

1．本書は出雲市外6市町広域事務組合の委託を受け、平成6年度に実施した一般廃棄物処理施設の管理道路新設工事に伴う奥ノ谷遺跡発掘調査の報告書である。

2．調査組織は、次のとおりである。

調査指導	島根県教育委員会文化課
調査主体	湖陵町教育委員会　教育長　立花重男
事務局	三原浩治（教育課長）　春日貴紘（社会教育係長） 吉田　肇（学校教育係長）　林　恵子（社会教育主任）
調査員	野坂俊之（社会教育主事補）
調査補助員	坂根健悦
調査作業員	今岡新悦、大野辰二、林　唯道、吉田健二、大野隆江、深井良子、 三原フミエ、井上愛子
遺物整理員	林　良子、中尾綾子

3．本書の執筆にあたって、次の方々に御助言・御指導をいただいた。
田中義昭（島根大学法文学部教授）、広江耕史（島根県教育委員会文化課）、足立克己・西尾克己・柳浦俊一・角田徳幸（島根県埋蔵文化財調査センター）、中村唯史（島根大学理学部）、川上　稔（出雲市教育委員会）、山崎　修（頓原町教育委員会）

4．発掘調査の際には、出雲市外6市町広域事務組合をはじめ、久文建設、地元地権者の方々に御協力をいただいた。改めて深甚の意を表します。

5．挿図中の方位は、磁北を示している。

6．本書に掲載した地形図のうち、「遺跡分布図」は建設省国土地理院発行の「神西湖」（25,000分の1）を使用した。

7．遺物の実測、写真撮影、本書の執筆編集は野坂が行った。

8．出土遺物および実測図・写真は、湖陵町教育委員会で保管している。

目　　次

序

例　　言

1．調査に至る経緯 ---------- 1

2．位置と歴史的環境 ---------- 2

3．調査の概要 ---------- 5

遺跡の概要

遺物の概要

4．まとめ ---------- 11

写真図版

1．調　査　に　至　る　経　緯

出雲市、平田市をはじめとする６市町広域事務組合は、近年のゴミおよび廃棄物の増大にともない処理施設を拡充する方針を固めていた。そのため旧施設を拡大する工事を開始すると共に出雲市側のみからのルートだけでは需要に答えることができないため、西側からのルートを建設することとなった。

平成５年度に、出雲市外６市町広域事務組合より埋蔵文化財事前調査の依頼があり、これを受けて湖陵町教育委員会では、出雲市教育委員会の川上　稔氏と島根県教育委員会文化課の角田徳幸氏に調査を依頼した。これによって一般廃棄物処理施設に近接した山側ではまったくそれらしいものが見つからず工事を許可する方向で検討されたが、その管理道路建設に伴う区域で、須恵器・土師質土器等を採集したため、事前に試掘調査しなければならない旨を伝えた。

平成６年６月５日に湖陵町教育委員会と広域事務組合は、埋蔵文化財試掘調査に関する協定書を取り交わし、６月７日から試掘調査を開始した。この調査は、遺物を採集した地点を中心として、管理道路建設予定区域内の谷奥部約１kmにわたって、合計１３本のトレンチを設定した。しかしながらどのトレンチからも遺物と思われるものは見られず、西から徐々に埋め戻しを行うことにした。

６月13日、No.４トレンチを埋め戻す段階になり、およそ３分の１ほど埋めた時に暗青灰色粘質土の中に土器があるのを発見した。埋め戻すことを中止し、まず掘削した土中を探ったところ縄文土器が多数含まれていたため、埋めかけていたものを再び掘ることにした。発見が遅れた理由は、土の色が土器の色に近かったことと、粘質の極めて強いものであったため土器片がまぎれている状態を判別することが難しい状況であったことによる。

島根県教育委員会文化課に問い合わせ、そのまま発掘調査に移行させた方が良いとの意見を受け、６月21日に広域事務組合との間で変更協定を締結し、調査を続行させた。狭く、深いトレンチに加え、雨の多い時期にあたり危険な状況での調査であった。この危険な状況は、県にも指摘を受けたため、仮の壁止めと支えを設置した。しかしながら、ほとんどの調査が終了した６月30日に大雨によりトレンチの壁が崩壊し、調査不能となった。継続するには危険が多く、工事掘削深度以下にあたることが判明したため、そこで調査を終了することにした。

そのほかのトレンチについては、まったく遺物を検出できなかった。ルート変更などにより調査期間そのものの見直しなどがあり、平成７年１月にすべての試掘調査を終えた。

2．位置と歴史的環境

湖陵町は出雲市の西隣、神西湖の南西部に当たる位置にある。国道９号線から北側は西浜地区と呼ばれ、南側は江南地区と呼ばれている。神西湖は、三瓶山東側の山麓脈から流れ出た川の水を吸収し、面積1.4㎢を有している島根県で第３位の大きさを誇る湖である。

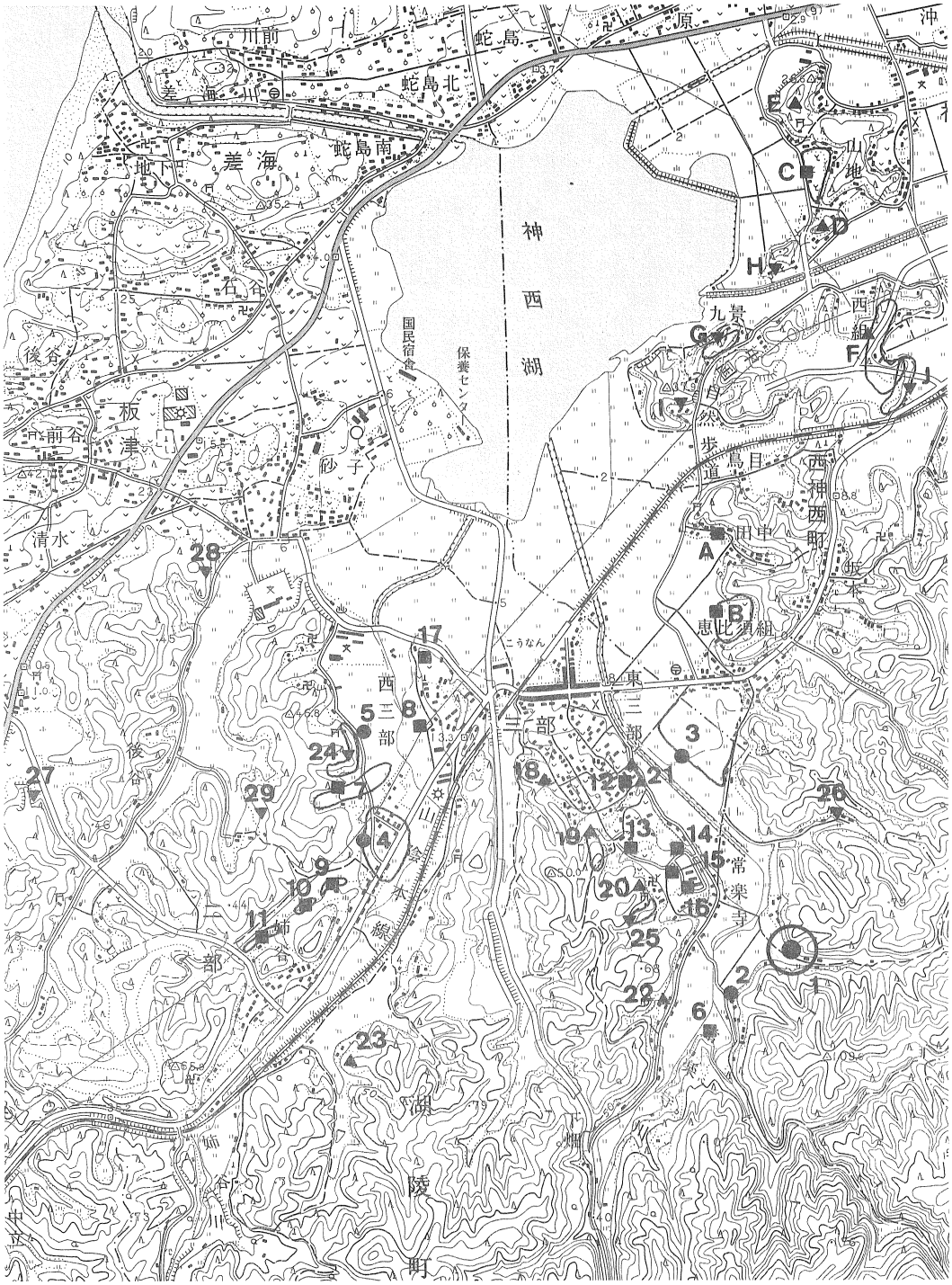
今回調査した遺跡は湖陵町の東端の常楽寺川域にあたり、最近になっていくつかの低地の遺跡が知られるようになった地域である。「奥ノ谷遺跡（１）」は、出雲市寄りの北から２つ目の谷である奥ノ谷から平野部へ抜ける北側丘陵に面した位置にあり、その南には船着き場と呼ばれるところがある。この丘陵は、急峻で、その縁辺に遺跡は立地していることになり、非常に珍しい条件にあるといえる。

ところで神西湖はその昔、「神門水海（かんどのみずうみ）」と呼ばれる大きな入海であったと考えられており、従来、湖陵町の低地はこの湖によって広く覆われていたように考えられてきた。ところが、そのような低湿地に存在する遺跡が、近年調査されてきており、その通説をいかに考えるか、問題提起されつつある。

三部竹崎遺跡（３）は、標高４～６ｍの極めて低地に所在し、遺跡としての範囲は40,000㎡以上にも及ぶ。丘陵縁辺部で縄文時代晩期の土器・石器、中央部で弥生時代前期の土器が大量に散布していた。また、古墳時代前期の土師器、中世以降の遺物も見つかっている。[1] 御領田遺跡（２）は、やはり支流である瀬の谷川の丘陵との境界部にあり、中世初頭、鎌倉時代の貝塚と縄文時代後期中葉の竪穴住居跡が検出された。この立地条件は、奥ノ谷遺跡と共通するところがあり、関連して考えるならば、注意を要する遺跡の一つである。[2] また、この付近では奈良時代～平安時代を中心とする土師器、須恵器の散布する滝ノ尻遺跡（６）もある。

これらのほかに、只谷遺跡（９～11）は、姉谷川の上流の細い谷部にあり、只谷Ⅲ遺跡(11)では、古墳時代中期～後期、只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡（９･10）では、奈良～平安時代の遺物が散布していた。その只谷から姉谷川沿いに出たやや広い平野部に、後期のものと思われる縄文土器の出土した姉谷恵比須遺跡（４）が位置し、そこから150ｍ下ると三部八幡下遺跡（５）があって、やはり縄文土器（晩期の突帯文土器）が出土した。その上面の丘陵には、石棺を有する八幡宮横穴墓群(24)が存在する。中島下遺跡（８）は、姉谷川をはさんだ反対側の水田面にあり、その丘陵上には弥生時代後期の遺物が出た中島遺跡(17)が所在する。

常楽寺丘陵上にもいくつかの遺跡（竹崎遺跡、雲部遺跡、庭反遺跡、常楽寺遺跡など）があるが、これら丘陵上に立地する遺跡では、縄文時代の遺物を有するものがないことは非常に興味ある事象ではないかと思われる。



第1図　遺跡分布図（1：25,000）

● 縄文時代遺跡　■ 散布地・集落跡　▲ 古墳　▼ 横穴墓

1：奥ノ谷遺跡　2：御領田遺跡　3：三部竹崎遺跡　4：姉谷恵比須遺跡

5：三部八幡下遺跡　14：庭反Ⅱ遺跡　A：田中谷貝塚　D：山地古墳

遺跡分布図一覧表

番号	名称	種別	概要	備考・文献
1	奥ノ谷遺跡	散布地	縄文土器	本報告書
2	御領田遺跡	貝塚ほか	竪穴住居跡、貝塚、シジミ、ハマグリ、猪骨、鹿角製装身具、縄文土器、石器、須恵器他	⑨
3	三部竹崎遺跡	散布地他	弥生土器、縄文土器、土師器、須恵器、石器、木製品、土師質土器、陶磁器、羽口他	⑨
4	姉谷恵比須遺跡	散布地	弥生土器、縄文土器、土師器	②・⑩
5	三部八幡下遺跡	散布地他	陶磁器、土師質土器、須恵器、土師器、弥生土器、縄文土器　他	⑩
6	滝ノ尻遺跡	散布地	土師器、須恵器、羽口	
7	保知石谷遺跡	古墓　他	木棺（箱形）、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器	⑩
8	中島下遺跡	古墓　他	土坑墓、人骨、土師質土器、須恵器、須恵質土器、常滑？、石器	⑩
9	只谷Ⅰ遺跡	散布地	須恵器、土師器、土師質土器、弥生土器、陶磁器、漆器、石器	⑩
10	只谷Ⅱ遺跡	散布地	須恵器、土師器、土師質土器、弥生土器、陶磁器、漆器、石器、黒曜石、馬歯、羽口　他	⑩
11	只谷Ⅲ遺跡	散布地	土師器、須恵器、土師質土器、木製品　他	平成６年試掘調査
12	竹崎遺跡	散布地	弥生土器、石斧、須恵器　他	
13	雲部Ⅰ遺跡	散布地	貝塚、弥生土器、須恵器、土師器、ヤマトシジミ	
14	庭反Ⅱ遺跡	集落跡他	掘立柱建物跡、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶磁器　他	①・②・⑤
15	庭反Ⅰ遺跡	集落跡	集落跡、弥生土器、土師器、須恵器　他	
16	常楽寺遺跡	集落跡他	掘立柱建物跡、貝塚、須恵器、土師器、石器、土師質土器、陶磁器　他	②・⑤
17	中島遺跡	散布地	弥生土器、磨製石斧、土師器　他	②
18	倉道古墳	古墳	横穴式石室、直刀、須恵器　他	消滅　②
19	雲部古墳群	古墳	３基（１号墳＝円墳、２号墳＝箱式石棺、３号墳＝円墳・舟形石棺）	②
20	西蓮寺山古墳群	古墳	２基、方墳	②
21	森の前古墳群	古墳	２基（１号墳＝円墳・須恵器、２号墳＝円墳？）	
22	産の岩古墳	古墳	横穴式石室、石棺、直刀、須恵器	
23	柿木田古墳	古墳	円墳、石棺、須恵器　他	封土流出
24	八幡宮横穴墓群	横穴墓	８穴確認（２０穴以上有？）、家形石棺１基、直刀、須恵器	③・⑧
25	安子神社横穴墓群	横穴墓	７～８穴以上、妻入家形構造、石床、直刀、須恵器	②・⑥
26	ののこ谷横穴墓群	横穴墓	須恵器	消滅
27	大池横穴墓	横穴墓	１穴、須恵器	⑦　消滅、別名　ずれこば
28	水原横穴墓群	横穴墓	２穴、人骨、須恵器	
29	松崎谷横穴墓群	横穴墓	３穴、須恵器	③
A	田中谷貝塚	貝塚	シジミ、カキ、弥生土器、土師器、須恵器ほか	
B	恵比須遺跡	散布地	須恵器、土師器	
C	山地遺跡	散布地	須恵器	
D	山地古墳	古墳	円墳、木棺、箱式石棺、仿製鏡、筒形銅器、直刀ほか	消滅　⑪
E	佐伯神社古墳	古墳	円墳	
F	神待山古墳群	古墳	方墳２基、円墳２基	消滅
G	正久寺横穴墓群	横穴墓	５穴確認	
H	湖東屋山横穴墓群	横穴墓	７穴確認	
I	九景横穴墓群	横穴墓	２穴確認	
J	神待山横穴墓群	横穴墓	９穴、直刀、金環	消滅

文　献

①杉原清一「庭反Ⅱ遺跡－昭和60年度緊急発掘調査報告書－」湖陵町教育委員会（昭和61年）

②杉原清一「庭反Ⅱ遺跡・他　昭和61年度調査報告書」湖陵町教育委員会（昭和62年）

③西尾克己、原田敏照、守岡正司「出雲西部における横穴墓の様相」『湖陵町誌研究１』（平成４年）

④山根正明「湖陵町と周辺の中世城館について(1)」『湖陵町誌研究２』（平成５年）

⑤西尾克己、守岡正司「常楽寺遺跡と庭反Ⅱ.遺跡の性格について－出雲西部出土の中世陶磁器を手掛かりとして－」『湖陵町誌研究３』（平成６年）

⑥門脇俊彦ほか『さんいん古代史の周辺』山陰中央新報社（昭和55年）

⑦丹羽野裕「島根県埋蔵文化財調査報告書　第ⅩⅧ集」島根県教育委員会（1992）

⑧近藤　正「島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅰ集」島根県教育委員会（昭和44年）

⑨角田徳幸ほか「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（御領田遺跡・三部竹崎遺跡）」湖陵町教育委員会（1994）

⑩野坂俊之ほか「神南地区担い手育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書［第５工区］（只谷Ⅰ・Ⅱ遺跡、三部八幡下遺跡、中島下遺跡）」湖陵町教育委員会(1995)

⑪川上　稔「山地古墳発掘調査報告書」出雲市教育委員会(1986)

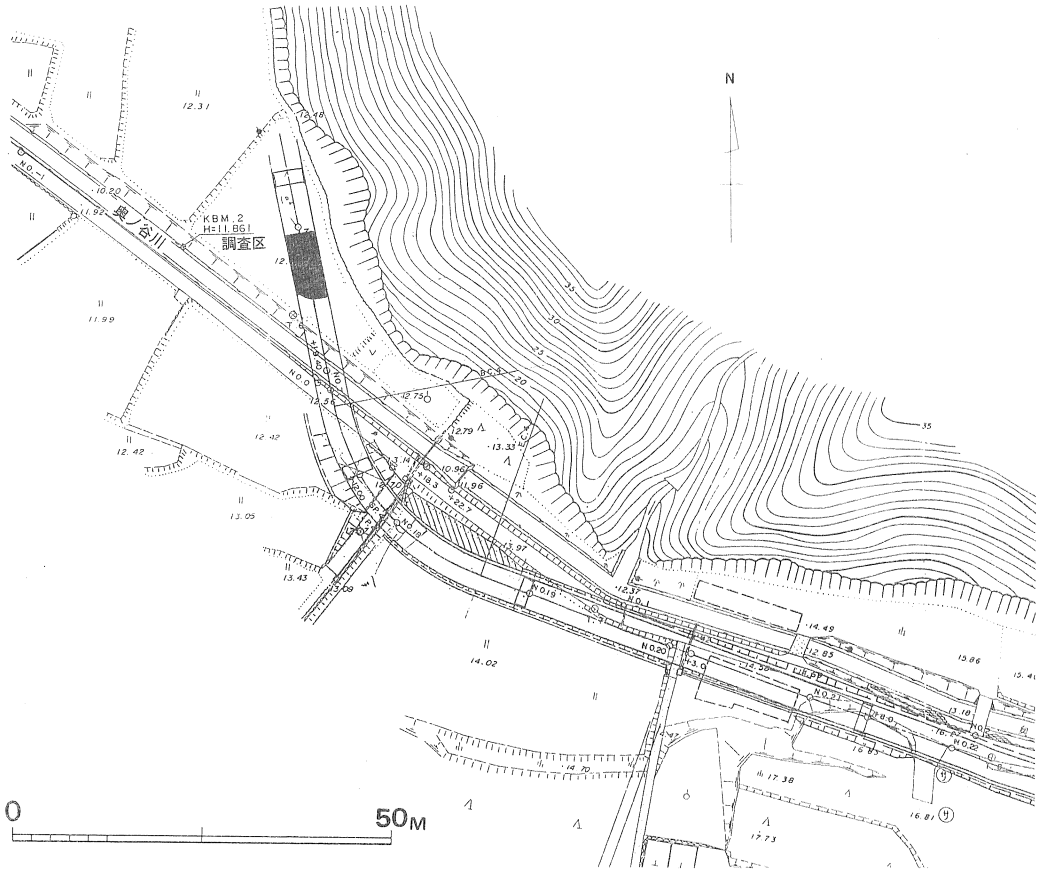
3．調　査　の　概　要

遺跡の概要

奥ノ谷遺跡は、「位置と歴史的環境」の項でも述べたように、急峻な丘陵の直下にあり、その立地条件は、今まで考えられ得なかった位置にあるといえる。調査区は、その急峻な山地をかすめる位置に設定したことになり、結局、幅４ｍ、長さ７ｍほどの範囲だけが遺跡として認定できた。遺物の出土状況等を考えると、遺跡は西側に広がる水田下に中心をもっていると考えられ、現在の奥ノ谷川は、昭和39年の大水害後に護岸工事されたものなので、川の下まで遺跡の範囲は広がる公算が大きい。

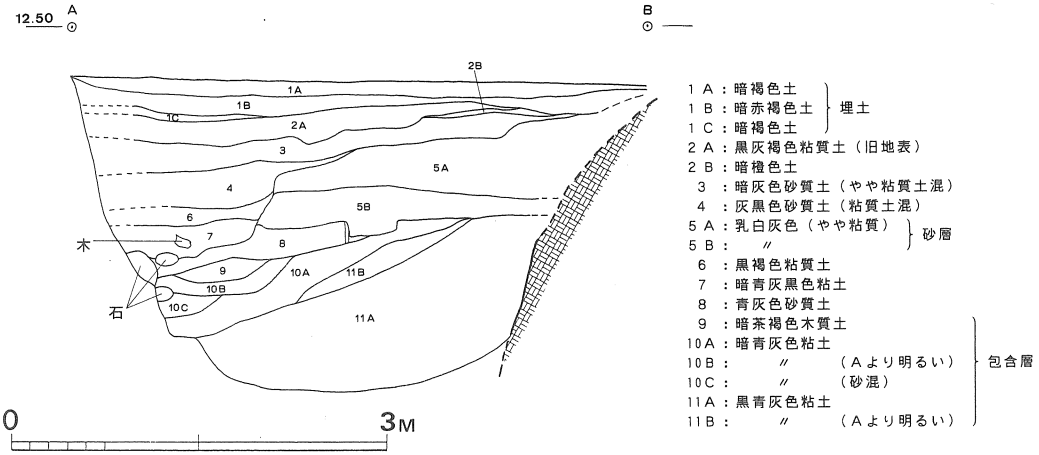
調査を行った地点の標高は、約１２ｍであるが、遺物包含層の位置はそこから１．５～２．０ｍ下にあたり、標高１０．０～１０．４ｍのレベルに集中して散布していた。

第３図は、遺物の出土状況で、第５・６図で図示したもののみをドットで落としたものである。



第２図　　奥ノ谷遺跡調査区位置（１：1,000）

第３図　　奥ノ谷遺跡調査区および遺物出土状況



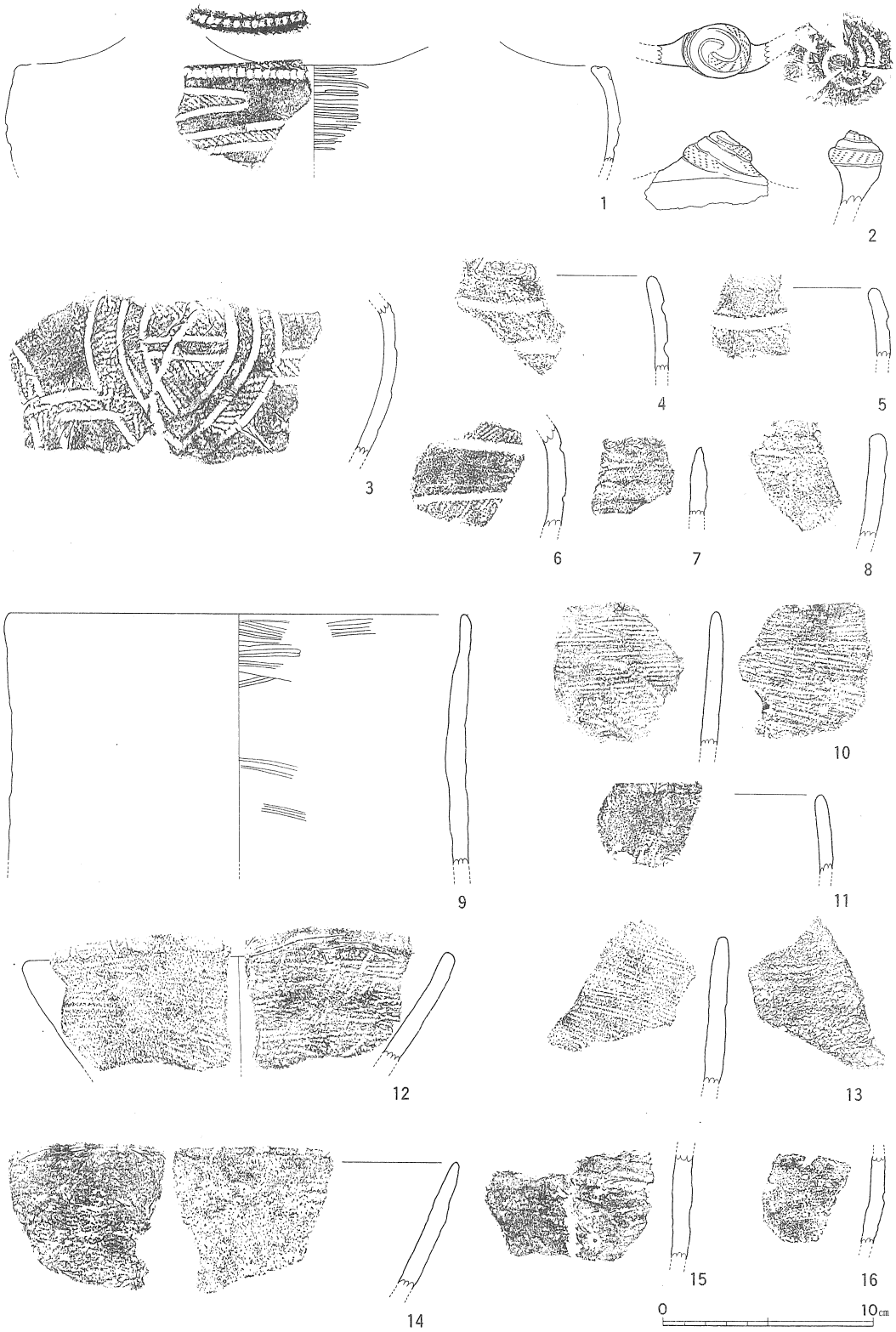
第4図　奥ノ谷遺跡土層図

図示していないものを含めると出土した総数は、１５０片を越えており、狭い調査区で、しかも立地状況を考えると非常に多い出土数であると思われる。等高線で示した地山のラインのちょうど切れ間にあたる個所（急峻な地形）から出土している様子がわかるが、これは次の第４図のセクション図からも判断できる。１層は後世の埋土で、５層はきめの細かい砂層である。また、５層以外の４～８層も砂質土であった。遺物を包含しているのは９層以下で、特に１０層は暗青灰色粘土、11層は黒青灰色粘土であり、多くの土器を含んでいた。

ここでは、包含層下の地山を検出していないが、これ以上の深さは、調査区の狭さからくる危険性と物理的に掘削不可能になったため調査を行っていない。

この土層の堆積状況を島根大学の中村唯史氏に見ていただいたところ、厚く堆積している砂層には有機物類が非常に少なく、また沈殿化していた様子もうかがえない。近くに船着き場と呼ばれているところがあり、住民の方々の認識は、神西湖がここまで広がっていたということになっているが、この砂層を見るかぎり、砂の粒子が均一でないことからも湖底あるいは湖岸の堆積とは思えない。常楽寺川の洪水等強大な作用によって、一気に砂が運ばれ、立地的な条件で川の氾濫を２次的に受けたことによる堆積なのではないか、という意見であった。

つまり、最下層に縄文時代の生活面があり、その後何らかの作用によって川の影響を受け、その上には耕作等の関係により埋土が行われたと考えられる。また、神西湖はこの辺りには影響を与えていないものと思われ、南側にある船着き場というのも事実なのかどうか考え直す必要があるものと思われる。



第５図　　奥ノ谷遺跡出土遺物(1)

遺物の概要

出土した遺物はすべて縄文土器で、しかも後期前葉の一時期に限定できるものである。

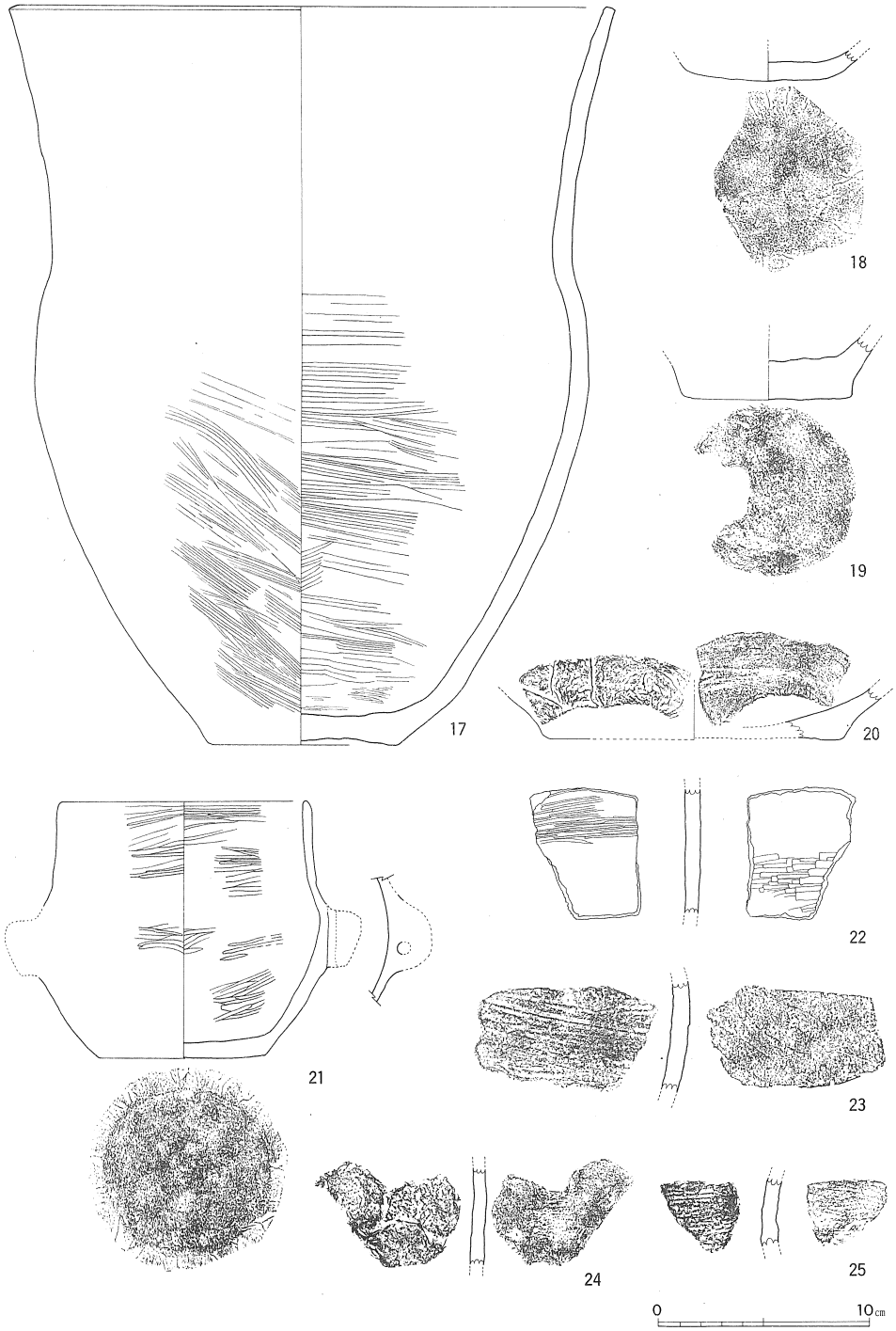
1～6は、磨消縄文を施す土器で、1は、深鉢の口縁部である。口縁下部にやや細目の沈線を画した中に縄文を施し、周囲を磨り消している。口唇部外面と上面に大きな刺突文を入れ、その間に縄文を施文する部分がある。この縄文部分が徐々に広がっていることから口縁は波状を呈しているものと推察される。内面は横位に細かいミガキがなされる。推定口径は、26.6cmを測る。2は、鉢の口縁部の把手部で、螺旋状に沈線を2重に入れ、磨消縄文がなされている。胴部は、ミガキがなされていると思われる。3は、深鉢の胴下半部と思われ、3本沈線の凸レンズ状[3]の文様内に横位に沈線を加え、これを横方向に繋げていくと思われるもので、きれいに磨消縄文を施している。4・5は、深鉢と思われるものの口縁部で、摩耗が激しく文様が消えかかっているが、いずれも横位に太い沈線を入れ、縄文帯をつくっている。6は、やや細い沈線をもつ同様の胴部片で、やはり磨消縄文を施している。

7は、深鉢と思われる先のとがった口縁部で、外面に幅の広い条痕がなされている。内面は風化が激しく不明である。8も同様に幅の広い条痕が施されているが、内面は不明。9は、推定口径21.4cmの深鉢で、外面は摩耗が激しく不明だが、内面に横位の貝殻復縁による条痕がなされている。10は、内外面ともに明瞭な貝殻による条痕が認められる。[4] 11は、幅広の条痕がなされるが摩耗が激しい。12は、10と同様な貝殻による条痕をもち、推定口径は、20.6cmを測る。13は、外面が幅広で、内面が細かい条痕という異なった手法を行うものである。[5] 14は、幅の広い条痕を施しているようである。15・16は、胴部片で、幅広条痕を外面に施している。

17は、口縁から底部まで復元できた唯一の土器で、内外面の下部のみに貝殻による条痕を入れるものである。外面は斜位に、内面は横位に入れているのが特徴的である。また、上部は条痕後ナデていると思われ、[6] 底部は上げ底にしつらえてある。底部径8.8cm、器高34.8cm、推定口径27.8cmである。

18～20は底部で、18は、底部と胴部の境が判然としないもので、ナデ調整していると思われる。19は、底部径8.0cmの厚い底部をもつもので、摩耗が激しく調整は不明である。20は、推定底部径13.8cmをもつ内外面を横位に幅広の条痕文を施すものである。23は、外面を幅広、内面を狭い条痕を施す胴部片である。24～25は、横位の条痕をもつ胴部片である。

21は、把手をもつ壺で、内外面を横位に磨くものである。器高12.1cm、底部径7.8cm、推定口径11.4cmを測る。把手のほとんどを欠いており形状は定かでないが、上から見て右側に寄って穿孔がなされている。22も内外面横位のミガキを施すもので、一方は幅が広く、もう片面は非常に細かいミガキである。この2点は、明黄橙色を呈し、他の土器と明らかに相違がある。[7]



第6図　奥ノ谷遺跡出土遺物(2)

4．まとめ

以上、非常に簡単に概要を述べてきたが、最後に若干のまとめをして終わりたいと思う。

今回の調査は、遺跡の調査範囲が非常に限られており、遺構もまったく検出できなかったが、縄文時代後期初頭の遺物を数多く検出できたことは非常に有益である。なぜならば、頓原町五明田遺跡[8]をはじめ、この時期の遺跡は中国山地山間部に数多く発見されてきたが、出雲地方、特に出雲平野一帯の地域では今まで検出されていなかった時期の土器であり、[9]縄文海進以後、山間部に住まいを移していた人々が少なくともこの時期から平野部に進出し始めていたことが明らかになったからである。すぐ南に位置する御領田遺跡では、縄文時代後期中葉の竪穴住居跡が見つかっており、[10]この湖陵の地が平野部進出の導火線的な位置にあったのかもしれない。これはあくまでも現時点での推察の域を出ておらず、今後低湿地遺跡の調査が進んでいけば、より多くの事例が出てくるであろう。しかしながら、そうであっても重要な遺跡であるという認識は改まることはないであろうと考える。

次に遺物について検討すると、文様をもつ土器の出土が非常に少ないが、それらはすべて磨消縄文を施しており、沈線で画している。これらは後期初頭の「中津式」以後の特徴である。しかしながら、奥ノ谷遺跡の遺物は、中津式の資料と比較して、沈線が細い傾向が認められ、第５図１・３のように縄文帯が狭いことが挙げられる。第５図３のような凸レンズ状の文様をもつものは、横田町竜ノ駒遺跡からも出土しているが、[11]レンズの内外を横位の沈線でつなぐ文様をもつものは出土例がない。これらのことを考慮すると、当遺跡出土土器のうち、純粋な「中津式」は第５図４・５に限られ、それ以外は福田ＫⅡ式古段階と称される土器群にあたるものと思われる。[12]次の時期となる３本沈線を基調とする福田ＫⅡ式のものはまったく見られないことから、[13]そこまで下るものではないと思われる。また、第６図21の把手をもつ壷は、前述した五明田遺跡からも出土しており、[14]ほぼ同時期と考えてよいように思う。

ところで、これらの遺物は当遺跡の上面丘陵からの流れ込みの可能性はないか、という問題がある。立地条件からするとその可能性も否定できないのであるが、遺物の量、そしてその残存状況、また１個体がまとまっている出土状況等を考えると１０ｍ近い高低差のある丘陵上からの落下は、考えることができない。また、奥ノ谷川上流からの流れ込みの可能性も、砂層内からの出土がないことから否定せざるを得ない。

最後に、本文でも述べたけれども、今回の調査を踏まえると、神西湖がこの地域に侵入していたという見解は容認できない。遺物包含層のレベルは、10～10.4ｍで、縄文時代後期に９～10ｍの高さまで水位が上がることはまず考えられない。遺物包含層の上面には砂層が厚く堆積していたが、湖沼による堆積とは認められず、むしろ河川の堆積によるものと考えられる。また、標高４～６ｍ

の三部竹崎遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代前期、古墳時代前期以降の遺構、遺物が認められ、少なくともその時期の神西湖の水位は4m以下であったことがわかる。ただしかし、昭和39年の大水害の際に、この地は神西湖とつながり、水浸し状態になったことが明らかになっている。[15]常楽寺川、姉谷川ともひとたび洪水になると一気に出水する河川であったと思われ、その時に行き場を失った水が氾濫して平野部を襲う可能性は高い。その水浸し状態は、一見神西湖が広がったように見えてしまうことはあり得るし、船で行き来しなければならない状況が続くこともあると考えられる。この時の状態をもって、神西湖の広がりを推察してはならないことは誰の目にも明らかであろう。ここで問題になるのは、むしろ、常楽寺川や姉谷川の出水量が生活面の形成に大きくかかわっていたのではないか、という点である。

これは、今後の調査の進展によって徐々に明らかにしていく問題であり、ここで結論を急ぐ必要はないと思う。また、それには自然科学の分野とも連携して進めていかなければならないであろうことを再確認し、むすびにかえたい。

註　記

（1）角田徳幸ほか「神南地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書（御領田遺跡・三部竹崎遺跡）」湖陵町教育委員会（1994）

（2）前掲書（1）

（3）上部文様欠損のため不明であるが、鍵手状に途切れる文様の可能性もある。

（4）貝ではなく、刷毛？のようなもので施文したものも見られるらしい。柳浦俊一氏の御教示による。

（5）これは、異なった工具(貝)を使用したのではなく、施文方法（縦を横に使用するなど）を変えて行っているように思われる。

（6）土器全面に条痕を施さないことは、注意をしておく必要があろう。

（7）そのほかのほとんどの土器は、暗褐色、茶褐色を呈している。

（8）柳浦俊一ほか「五明田遺跡」頓原町教育委員会（1991）
山崎　修ほか「中山間地域農村活性化総合整備事業および八神地区農業集落配水事業に伴う五明田遺跡発掘調査報告書」頓原町教育委員会（1992）

（9）縄文時代早期～前期にかけての土器は、上長浜貝塚、菱根遺跡などで出土している。角田徳幸、川上稔氏の御教示による。また、晩期の土器は原山遺跡、矢野遺跡はじめ多く見つかっている。

(10) 彦崎ＫＩ式期と考えられる。前掲書（1）

(11) 宍道正年「島根県の縄文式土器集成Ｉ」報光社（1974）　図版第三十二参照。縦横逆で、施文位置も違う。

(12) 沈線の変化点で沈線が途切れたり、渦巻文の端部が入り組みになったりする「中津Ⅲ式」と仮称されていた土器群を指す。
足立克己「中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」島根県教育委員会（1991）
玉田芳英「中津・福田ＫⅡ式土器様式」『縄文土器大観』4　小学館（1989）
千葉　豊「西日本縄文後期土器の二三の問題」『古代吉備』第14集（1992）
足立克己氏、柳浦俊一氏には上記文献を紹介していただいたほか、様々な御教示をいただいた。記して感謝申し上げる。

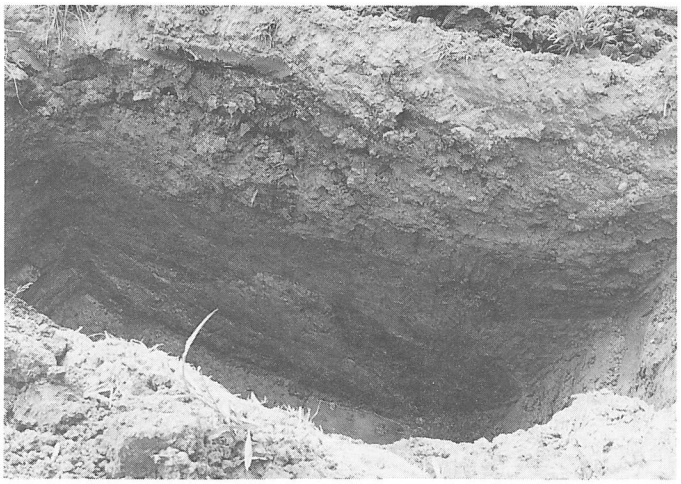
(13) 第5図3は、3本沈線であるが、縄文帯内の沈線でないことや横位の繋ぎ線は2本沈線の縄文帯であることなどから新段階に入らないものと考える。

(14) 前掲書（8）柳浦　第21図参照。

(15) 標高15mに位置する家屋が床下浸水した。

図版１

奥ノ谷遺跡近景
（東から）

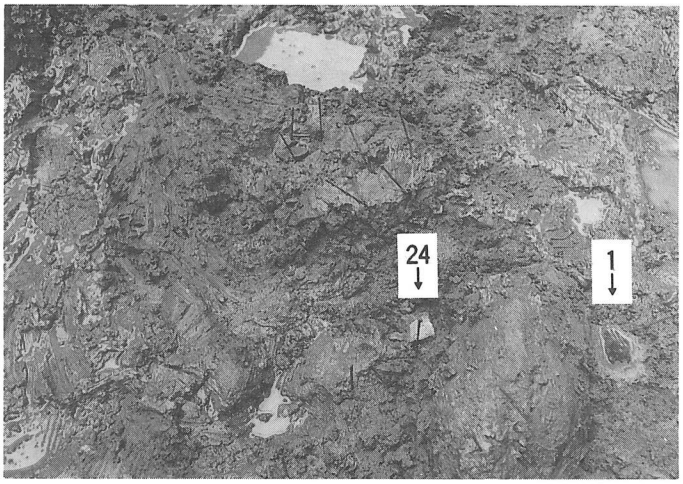


トレンチ土層状況

発掘作業

図版 2

No.12 出土状況



No.1・No.24
出土状況

No.17 出土状況